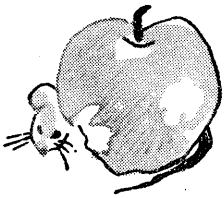
ニューヨークから インドへ



石島　襄二

ニューヨーク在勤中に「薬石効なく」二人目ができてしまいました。長男にひとりっ子の弊害が既に顕著となっておりましたから、下ができたことは大変結構だったのですが、なにしろ家内は、帝王切開でないとベビーを生めないという厄介な身体の持ち主なので、どうにも閉口しました。なにが閉口かというとこれはもちろん経済上の理由からです。当時アメリカでは、正常分娩で病院の諸経費七〇〇ドル（約二十五万二千円）というのが相場でしたが、帝王切開ともなるとその倍以上の一五〇〇ドル（約五十四万円）かかったのです。一ドル＝三百六十円という円切り上げ前のレートが厳然とまかり通っていた時代でしたし、収入の一・五倍に相当するこの時ならぬ出費はこたえました。その後ニューヨーク州で解禁となった妊娠中絶も当時まだご法度でしたから、高い手術代を払ってでも生むしかないのです。

日本に中絶に帰るという手もあるのですが、往復の航空券代が帝王切開の費用と丁度同額という皮肉さでした。銀行から追加のローンを仰ぐなど、無理算段した甲斐あってか、幸い二番目には元気な女児に恵まれました。ついでながらこの時同じアパートにいた四人の日本の奥さんが相前後して出産、アメリカのパスポートをもったベビーを連れて帰国したのは何とも愉快でした。

育児に追われている中に、アッという間に二年半が経過し、お誕生近い長女を加えて親子四人、今度は太平洋を渡って帰国しましたが、帰国後数ヵ月でインドのニューデリー駐在を命ぜられました。ニューデリーには、大阪府教育委員会の肝いりで派遣されている、教育熱心な校長先生以下男ばかり六人の先生に生徒数三十数人、エア・コン付き教室に送迎スクール・バスという恵まれた日本人小学校があり、英、米、日の三ヵ国で腰の落着かない小学校生活を送って来た長男は、ここでやっと安住の地を得た感がありました。

一方、アメリカ時代ベビー・ベッドに何時間もほったらかしにされていた長女は、インドに来て専属のアヤ（乳母）があてがわれ、境遇が一変しました。境遇が一変したのは長女ばかりではありません。運転手兼皿洗い兼メッセンジャー・ボーイだった亭主も、女中兼コック兼洗濯女だった家内も一挙に格上げされ、バラ・サーブ（大旦那）、メン・サーブ（奥方様）と呼ばれ、召使いたちにかしずかれる身分となりました。といってもこれは我々が急に金持ちとなった訳でなく、国民の大多数が極度の貧困にあえぎ、失業率が異常に高いインドでは、労働力があり余っており、ウソのように安い賃金で多数の使用人が雇えるためです。もちろん使用人がもてるのは上流階級だけですが、日本人を含め外国人は自動的に上流階級に繰り込まれてしまうので、体面上どうしても、何人かの使用人を抱えることになります。

貧乏記者の私共でもコック、ベアラー（召使い）、スイーパー（床掃除人）、運転手、ドビー（洗濯屋）、マリー（庭師）、それにアヤの計七人を使っていましたが、そのサラリーの合計が一〇〇〇ルピー（約四万八千円）足らずという安直さでした。この中住込みはコックだけでしたが、残りの使用人たちも、早朝出勤してから夜まで家に詰めていて、なにかと家事をやってくれるのですから、主婦にとっては「天国」です。もっともこの天国大変暑くて、四―五月の暑熱期には四二―四度に達し、日中冷房の無いクルマでは、熱風が吹き込むので、窓を閉め切って走る方がましというひどい高温になります。その上敗戦直後の日本をしのばせる物資不足で、世界のたいていの大都市で売っている日本食品も手に入らないし、人の顔さえ見れば物や金を欲しがるインド人の気質も手伝って、日常生活面での苦労もなかなかなものでした。

とはいっても家内は、結婚後十年にして初めて余暇を手に入れ、ゴルフや運転手付きの買物など、典型的なレジャー・マダム暮しを満喫して、すっかりご機嫌でした。朝起きればスイーパーの手で屋内の掃除は済んでおり、マリーが芝に水を撒く音を聞きながらコックの用意した朝食のテーブルに向

かうといった寸法です。七時半にはアヤが出勤して来て娘を着変えさせ、日よけ帽子をかぶせて朝方の涼しい中に近所の公園に遊びに連れて行きます。公園には同じくアヤに手をひかれた白、黄、黒、茶などいろいろな肌色の幼児たちがやって来て、人種差別などどこ吹く風と入り乱れて遊び出します。その間にアヤたちは木陰で車座になって、やれどこのメンサーブがケチだの、あとこの家では昨晩、派手な夫婦ゲンカがあったのと世間話の花を咲かせる訳です。

アヤは概して中年の子持ち女が多く、長年外人家庭をわたり歩いて来たアヤの中にはカタコトの英語をあやつり、結構しつけも厳しく、かけ出しのお母さんなど足もとにも及ばないようなしっかり者も見受けられました。

私共で雇ったアヤ、ラクシュミは娘が某商社員宅で同じくアヤをしているという、いわば母子相伝のアヤでした。インド南部のタミール生まれで鬼瓦のようなご面相でしたが気はいたって優しく、長女もよくなつきました。

長女がタミール語まじりのヒングリッシュ（インド式英語）という奇怪な言葉をしゃべり出した二歳の秋に「タイニー・トット・スクール」というニューデリーでは指折りのナーセリー・スクールに入園させました。これはごく当り前の幼稚園でしたが、白人の園長先生（女性）以下、ナントカＰＭに出て来る真理アンヌのような顔をした若い助手も大勢いて、なかなか行き届いた世話を午前八時から午後零時半まで見てくれました。兄と違って生れて以来人見知りということを知らない長女は、最初から結構楽しく通園していました。幼稚園にもアヤが二、三人いて下の面倒をみるので、自分で用を足せない子どもも預けられるのが取り柄でした。月謝は月一〇〇ルピー（約四千八百円）、飲み物は幼稚園持ちですがオヤツは持参でした。

二年半のインド暮しの間に家内が朝はゴルフ、午後は買い物、夜はパーティーという生活ですっかりスポイルされたのに対し、長男は一年の三分の二を泳いで暮したためすっかり水泳が得意となりましたし、長女はノビノビと物オジしない性格に育って呉れたのは、不幸中の幸いといえたかもしれません。（ＯＥＣＤパブリックセンター）